

「彼らは世に残ります」

ヨハネ 17:6-19

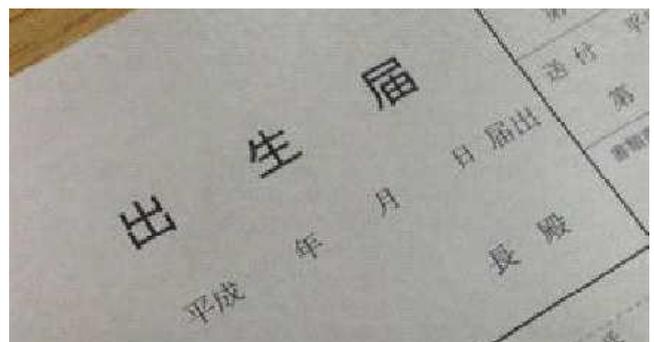
挽地茂男

2020.5.10 日本基督教団千歳丘教会

ある「説教集」が戸籍をめぐる悲惨な問題を指摘しております。近年日本では、「無戸籍」となる人が少なくとも年間500人以上も増加しているそうです。戸籍がないという事態がすぐにはピンときませんが、戸籍がありませんから学校に一度も通ったことのない人がでてきます、また、戸籍の無いまま30年以上生きてきた人もいるというようなことが、NHK（クローズアップ現代、2015.5.21）の取材で明らかになっています。背景には、DV（家庭内暴力）や離婚の増加があります。夫の暴力から逃げ出し、居場所を知られるのを恐れて離婚の手続きに入ることもできずに歳月が流れます。その間、新たなパートナーと出会い、その間に子供が生まれた場合、法律上は離婚が成立していませんので、その子供は戸籍上の「夫の子」、自分が逃れてきた夫——実質的には前夫——の子と見なされ、「前夫の戸籍」に入ることになります。

暴力的な前夫の戸籍に入りたくないものの、もし何らかの手続きをすれば、今の居場所が戸籍上の「夫」に発覚することになってしまいます。それを恐れて、母親が出生届けを出せず、子供が無戸籍になってしまうのです。子供の就学のために、どうしても戸籍が必要になり、実の父親（新しいパートナー）の戸籍に入れるために裁判所で手続きをとるケースもありますが、そうなれば、前夫（戸籍上の夫）が再び暴力的に関与することが目に見えているので、それを恐れて、断念する人も多いのです。しかもこの法律は、120年前、明治時代にできた法律で、すでに現在の婚姻や家族の状況に合わないのが現状だと言われています。

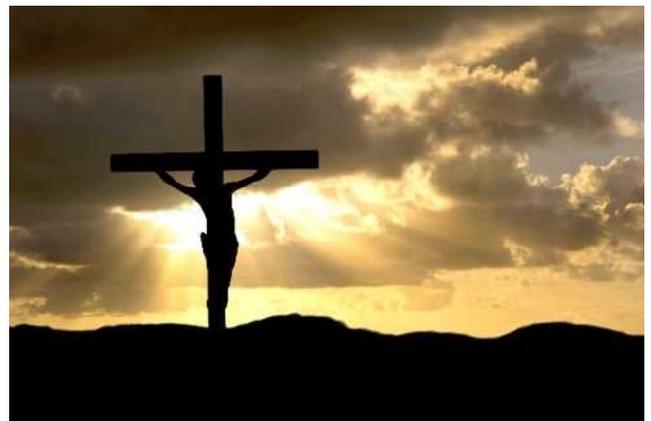
戸籍を持たない彼らは、保険証、住民票、免許証をはじめとする氏名、性別、住所を証明するものを一切持つことができません。従って、銀行口座も持てず、アルバイトの



給料も親戚の口座に振り込んでもらい、職場ではその親戚の名(偽名)を使って働くことになります。NHKの番組には、「32年間、戸籍がないままで暮らしてきました」と言う女性が登場します。彼女が「今、最も恐れていることは交通事故だ」と語ります。保険証も、住民票もない自分が救急車で搬送されても、高額の治療費は払えず、意識を失ったまま死んでしまった場合——戸籍上は存在していないのですから——自分がどこの誰だかを誰にも知られずに死ぬことになります。出生届がないのですから、死亡の事実を記載する書類もないのです。いわゆる「無縁仏」として処理されるほかはないのです。生きている時も死ぬ時も、本当の自分を知る者はいない。誰にも知られない存在として生き、死んでいく。この世から消えていく。その空しさ、その悲しみは底知れず深いと言わざるを得ないでしょう。彼女には、心底から「父よ」と呼べる対象がない。自分の存在を受け止めてくれる存在がいらないのです。

この説教集は子供たちを取り巻く、様々な悲惨な例を挙げてこう述べています。「自分の命の創造主

と出会っておらず、『父よ』『わが神よ』と呼ぶことができない時、人間は多かれ少なかれ孤独な迷子なのである。そのことを自覚しているか否かの違いがあるにせよ、迷子である限り、すべての人間に本来与えられている目的地にたどり着くことができないことに変わりはない。…DVの夫、暗室に幼児を飼い殺しにした父親、コインロッカーに赤ん坊を捨てた女、その女を捨てた男、子供を学校に行かせなかった父親、パチンコ屋を転々としつつ、子供をパチンコ屋の駐車場に放置して忽然と姿を消した父親、(これらの人たちだけではない)世間的、人道的に正しく生きているが創造主を知らない人間、つまり孤児^{みなしご}であり迷子であるすべての人間のために、イエスは罪の赦しを求めて祈った。『父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。』」



詩編 27 編の詩人はその 10 節で「父母が子を棄てる」という究極的な孤独、人の最も苦しい、最も大いなる悲しみと対比して、神の愛を語ります。「27:10 父母はわたしを見捨てようとも／主は必ず、わたしを引き寄せてくださいます」と語ります。



。「父母が見捨てようとも」しかし主は彼を見捨てることはない、と翻って信仰を告白するのです。イザヤ書もまた同様の対比で、主の慈しみを語ります。イザヤ書 49 章 15 - 16 節「49:15 女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも／わたしがあなたを忘れることは決してない。49:16 見よ、わたしはあなたを／わたしの手のひらに刻みつける。」

今日の聖書の箇所は、ヨハネ福音書 17 章の「**大祭司の祈り**」の第 2 番目の祈りです。主イエスがこの世に残していく弟子たちのために祈る祈りです。6 - 10 節。

「17:6 世から選り出してわたし

に与えてくださった人々に、わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。17:7 わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。17:8 なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。17:9 彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。彼らはあなたのものでからです。17:10 わたしのもものはすべてあなたのもので、あなたのもものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。」

逮捕から十字架の死に向かう前日でした。弟子たちに向かって——たとえ父母が彼らを捨て、社会が彼らを見捨てることがあったとしても——主の愛が決して変わらないことを、主イエスは言葉と行動で明らかにします。洗足が行われた「別れの食事」の冒頭にこ

う記されていきました。「13:1 さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」人は愛する者との別れが現実のものとなった時、自分の持っているもののすべてと愛を与え尽くそうとします。

この13章の言葉を読んだときにご紹介した文章は、このことをよく教えてくれます。しつこいようですが、再度ご紹介します。原崎百子という牧師の夫人の文章です。ガンを宣告され夫や子どもたちとの「別れ」を見据えて書いた文章です。『わが涙よ わが歌となれ』という題名の単行本に収録されています。夫を通して「末期のガン」で余命幾ばくもない事を知らされたその夜から書き残した子どもたちへの言葉です。

●愛する子どもたちへ

1978年6月28日（水）

あなたがたは信ずるだろうか、この母が、あなたたちをこよなく愛していることを。……どの一人をもかけがえのないものとして、こんなにも切ない思いで愛していることを。

あなたたちを、この体の中ではなく、父と共に、感謝と喜びをもって、迎え、抱き、育て、力を合わせていつくしんできたことを。

あなたがたが、この母の愛をもし信ずるならば、どうか信じて欲しい、神さまの愛を信じて欲しい。一人一人をかけがえのないものとして、いつくしんでくださっている神さまの愛を信じて欲しい。

たとい、お母さんが天に召されても、それでも、あなたがたが信じつづけられるように。悲しみを乗り越えて生きていけるように。……

四人の子供たちよ。……

お母さんを

お母さん自身を

あなたがたにあげます。

（原崎百子 『わが涙よ わが歌となれ』 新教出版社、1979）

今、主イエスは迫り来る十字架の受難にむかって、弟子たちとの「別れ」を意識しながら祈ります。祈りの内容は二つです。1つ目は、

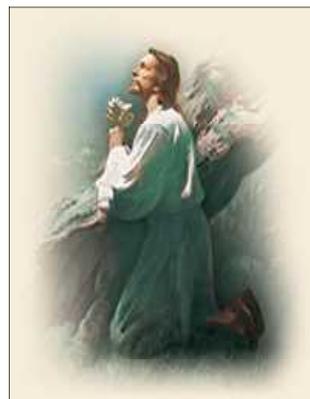


17章11-13節。「17:11 わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。17:12 わたしは彼らと一緒にいる間、あなたが与えてくださった御名によって彼らを守りました。わたしが保護したので、滅びの子のほかは、だれも滅びませんでした。聖書が実現するためです。17:13 しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。」

まず主イエスは「御名によって彼ら(弟子たち)を守ってください」と祈っています(11節)。これが第一の祈りです。主イエスは今この世を去って神の御許に行こうとしています(11,13節)。祈りは主イエスの不在を前提として、その不在においてさえも保たれるべき、神とキリストと弟子たちの関係のために祈っているのです。

「わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください」

という表現は、原文を忠実に読むと、「わたしに与えてくださったあなたの御名のうちに彼らを守ってください」となります。御名とは神の御名をさしています。イエス・キリス

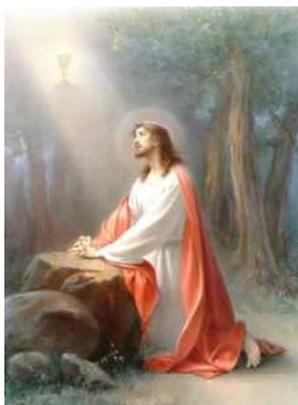


トが、この神の御名を弟子たちに明らかにし、そして弟子たちは神の御言葉を守ったのです。〔新共同訳が「御名」とか「御言葉」と「御」をつけて訳しているところは「あなたの」すなわち「神の」という所有代名詞が付いている。〕6節。「17:6 世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。」ユダヤ人は神を知る人々です。そのはずです。しかしここでは、ユダヤ人の血統(血筋)も、旧約以来の選民の伝統も意味を持たないのです。神が選び出してキリストに与え、キリストが神の御名を現した弟子たちに、真理が明らかにされたのです。弟子たちが今後ユダ

ヤ人たちから受けるであろう迫害は、目に見えるような気がします。

ヘブライの思想では名前とは人格そのものを意味します。主イエスは、弟子たちが神の内に、神との関係の中に守られるように祈っています。それによって弟子たちが、一つになる

ためです。11節後半。「わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」ここで示される一



つになるプロセスは「神とイエス・キリストが一つである」ことを前提として、その神の御名のうちに弟子たちが守られ、その結果、弟子たち同士が「神とキリストが一つである」ように一つになるという順路を取るのです。一致は過剰に横の人を意識した連帯によって得られるのではないのです。同じ神を仰ぎ見るときに、信じる者たちの間の一致は、「神とイエス・キリストが一つである」ような強度(強さ)をもちうるのです。

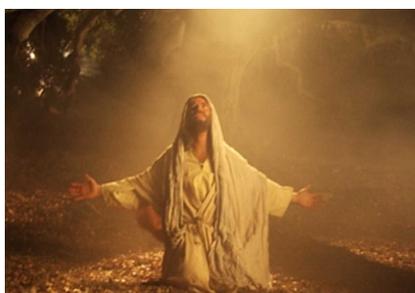
主イエスのこのような祈りには、わたしたちが一つとなることを妨げるものがこの世には存在す

るという前提があります。当然かも知れませんが、この世はやがて、キリストを殺すことになるのですから。わたしたちがキリストを通して神と結びつき、そのことを通してわたしたち同士が一つになることを妨げるものが、主イエスが弟子たちを残して去って行くこの世には満ちているのです。しかし不安は喜びによって拭い去られます。主イエスの祈りが教えるように、弟子たちが、また、わたしたちが一つになるとき、「わたし [= 主イエス] の喜びが彼らの内に満ちあふれるようになる」(13節)からです。少し不思議な表現です。彼らの内に喜びが満ちあふれるのは分かるのですが、彼らの内に満ちあふれる喜びが、「彼らの喜び」と言われずに、「わたしの喜び」すなわち「主イエスの喜び」だと言われています。つまり神にあってわたしたちが経験する喜びは、わたしたちだけの喜びではないのです。主イエスはそれを「わたしの喜び」だと語るのです。主イエスはわたしたちと共に喜んでおられるのです。いや、わたしたちの喜びに主は宿っておられる、と言ってしまってもよいでしょう。こ

の喜びは、主イエスがその生涯において、父なる神と一つであることを妨げるさまざまな躓きや阻害要因をのりこえて、獲得された喜びと同じ質の喜びです。

主イエスは神の子なのだから、神と一つであることを妨げるような躓きや阻害要因がなかったと考えるのは間違いです。先週、17章の1-5節を読んだときに取上げた、ヘブライ人への手紙が語っていました。5章7節です。「5:7 キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」キリストは、神と等しい姿を捨てて地上に下った救い主なのです。天に向かって目を上げて祈るイエスは、地上を歩む旅人でもあります。

天と地の間の裂け目におかれているのです。



主イエスもその生涯において、「叫び声をあげ」「涙を流」さなければならなかったのです。その叫び声は、ま

た、その涙は、父が遠くにおられるとしか思えないような状況があるということを示しています。しかし、父なる神と一つであることを妨げるさまざまな躓きや阻害要因は、祈りの中でのりこえられていったのです。そのようにして、喜びは繰り返し獲得されていったのです。そして、この一つであることの喜びが弟子たちの内にもありますように、と彼らとの別れに際して、主は祈っておられるのです。「御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」

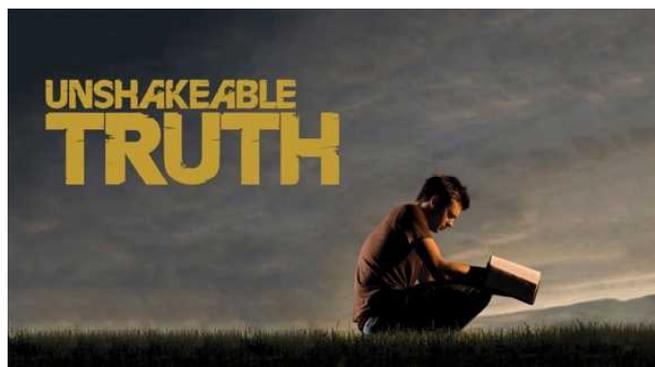
彼らも一つとなること。神が地上に残る弟子たちを、御名のうちに守ってくださることによってそれは実現するのです。つまり、人と人との一致は、神との関係から始まるのです。実は、人と人から始まるのではないのです。対人との関係は、根本的には神との関係の現れなのです。神の前のわたしの有り様ようが、人に対するわたしの有り様となるのです。根本的な対人関係には、外交的な人扱いのうまさや、人付き合いのうまさを超えたものがあるのです。神の前に試された真実が、人と人との間の

真実となるのです。神に愛され神を愛する愛が、人と人との間に息づく愛となるのです。人が一つであるということは、取り繕った人間関係によっては存在しえないものなのです。それは神の前に真実と愛によって育てあげるものとして存在するのです。このようにして神に源を持つ交わりから生じる喜びが、主イエス不在の欠けを覆うのです。

二つ目の祈りはこれです。14 – 19 節。「17:14 わたしは彼らに御言葉(あなたの言葉)を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。17:15 わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。17:16 わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。17:17 真

理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。17:18 わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。17:19 彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。」

いろいろ祈られているようですが、この祈りの中心は「真理によって、弟子たちを聖なる者としてください」ということです。これが第二の祈りです。〈真理〉という言葉はギリシア語では〈アレーテア〉と言います。この単語は、三つの部分に分けることができます。〈ア〉と〈レーテ〉と〈イア〉です。〈ア〉は否定(Not, いいえ)を表す接頭辞、〈レーテ〉は〈忘れること、忘却〉という意味で、語末の〈イア〉は性質や現象の具体化を意味する名詞語尾です。つまり、〈真理〉という言葉の原意(元々の意味)は〈忘却ではなくなること〉〈忘れたままではありえないこと〉〈忘れていたものを思い出すこと〉、少し長めに説明すると〈本当は知っているのに、忘却によって人間精神の中に隠されて



いるものを、忘却から取り出して明らかにすること」という意味なのです。

御言葉の真理は神とわたしたち人間についてのあらゆる真相を明らかにします。弟子たちやまたわたしたちが、本来神によって創られ、神によって生かされていることを、わたしたちが本来あるべき神との関係を忘れて迷子になっていることを、それでも神に愛されていることを、そして本来帰るべきところがどこであるかを、忘却から取り出し明らかにするのです。弟子たちには、主イエスが世を去った後、主イエスの愛の記憶が残ります。愛の記憶は、弟子たちと主イエスの様々な経験の中に宿り、繰り返し主イエスの真実を忘却から取り出して、想起させるのです。主イエスの愛の真実こそ「真理」なのです。愛の記憶は、聖霊の働きを通して人を真理を知る者にするのです。16章13節の「**真理の霊が来ると、あなたが**



たを導いて真理をことごとく悟らせる〔悟らせる＝道をつける〕」という言葉はそういうことを意味しているのです。

またここで使われる〈聖なる者とする〉という言葉は、〈聖別する〉、聖なるものとして取り分けるという意味の言葉です。身近なところでは「主の祈り」の「御名を**崇めさせたまえ**」〔=カトリックや聖公会の訳では「御名が**聖とされますように**」〕という言葉がそうです。取り分けて特別に大切なものとして扱うということです。ですから、神様への献げ物をする際に、〈聖別する〉という言い方をします。

19節で主イエスはこう語っています。「**彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです**」。「ささげます」と訳されているのは、〈聖なるものとする・聖別する〉という言葉です。この19節にも〈真理〉と〈聖なるものとする・聖別する〉という言葉がそろって出てきます。原文の含みをおさえておきます。「彼らのために、わたしは自分自身を**聖別**します。それは彼らも真理に

よって**聖別**されるためです。」聖なるものであること、聖さは、真理と深く関係しています。真理なくして聖さは存在しないのです。また取り分けられなければ、聖さは確保されないのです。真理はわたしたちを聖なるものとして、聖別するのです。しかも真理は、固定して動かない不動の真理として立っているではありません。〈真理の霊が…導く〉と言われるように、真理は霊的でかつ動的なのです。その〈真理の霊〉がわたしたちを導いて「**真理をことごとく悟らせる**」のです。わたしたちが〈真理の霊〉がつけた道を通ってたどり着く所、つまり神の御前、神のふところの中であって、わたしたちが聖別されるのは当然のことなのです。聖さはそこから来るのです。遠藤周作は母親から「あなたは正しくない」と言われるより、「あなたはホーリーじゃない(聖くない)」と言われることが、非常にこたえたと言っています。聖さ(ホーリーであること)はわたしたちの内から来るではありません。聖さはわたしたちの性質でも資質でもありません。わたしたちの信じる方が聖いので、わたした

ちも聖いのです。聖さは関係から来るのです。たとえわたしたちが聖くなくてもそうなのです。弟子たちは世から取り分けられて、そして世に憎まれながらも、世から憎まれることにおいてキリストと一つであることを知り(14節a)、同時に「憎しみ」に満ちたこの世に遣わされるのです(18節)。人々の「憎しみ」を前にしながらも立ってられるのは、この〈真理の霊〉の助けによる以外はないのです。

17-18節で、「17:17 真理によって、彼らを**聖別**(聖なる者と)してください。あなたの御言葉は真理です。17:18 わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました」と主は言われます。彼ら(弟子たち)のためにそしてわたしたちのために、主イエスはご自身を**聖別**します。そして十字架に献げます。それは彼らもそしてわたしたちも、真理によって**聖別**され、尊い使命



に自らを献げるのです。

わたしたちが現在信仰者であるのは、弟子たちその尊い使命に献げた生命が生み出した結果なのです。主イエスによって遣わされた弟子たちの宣教が、わたしたちの信仰が始まる遠く隔たった出発点なのです。主イエスは、この大祭司の祈りの中で、弟子たちの宣教によって信者となる人々のためにも祈っています（17:20「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。」）。この祈りは来週の説教で読みます。わたしたちはまた、その主イエスの祈りの果実でもあるのです。そしてわたしたちもまた、主によって遣わされていくのです。主の霊と真理の言葉に導かれて歩んでまいりましょう。

最後に主イエスが、「別れの説教」の中で語られた言葉をもう一つ読んで終わります。ヨハネ14章16－18節。「ヨハ14:16 わたしは父にお願いしよう。父は別の助け主〔＝新共同訳「弁護者」〕を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。14:17 この方は、真理の霊である。

世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。14:18 わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」

新しい1週間の歩みのために、祈りましょう。

2020.5.10 日本基督教団千歳丘教会

